

## 2019 年度外国人留学生向け懸賞論文論文選考委員会委員長講評

本年は 19 編の応募論文があった。今年の特徴は、すべて英文であり、かつ当初多かった中国と韓国からの留学生の応募がなかったことである。英文に限らず、和文も受けつけているので、中国、韓国、台湾の留学生にもぜひ応募していただきたい。

審査委員は、すべての応募論文を読んだ上で、規定に従って採点表を作成し、最終審査委員会において、厳正な審査過程をへて受賞者を決定した。その結果、第 1 位に論文 1 編、第 3 位に論文 3 編を選考し、努力賞に該当する数編を選出した。

今年、論文として形式、内容ともに完璧な論文はなかったが、Nehal Khan 氏の“Level of Satisfaction and Attitude towards the Japanese National Health Insurance: a Case Study of International Students in Kyoto City”を最優秀賞とした。この論文は、アンケート調査に基づいて、日本の公的健康保険に対する海外留学生の満足度を調査した論文である。留学生にとって、病気および怪我に対する医療ケアは大変重要なことであるにもかかわらず、日本の公的健康保険制度が詳しく知られていない状況が明らかになった。実態調査にもとづいて、留学生の健康維持に関する有意義な結論を導いている点で高く評価したい。ただしサンプル数の少ないこと、および国費留学生と私費留学生の違いを考慮していないことなどによるサンプリングバイアスが生じている可能性がある。さらに分析手法も記述統計的分析の範囲にとどまるなど、より精緻な分析を行う余地が残されている。とはいえ、学部所属の若い学生が、汗を書いてアンケートデータを集め、それを集計して分析した努力については賞賛に値する。

第 3 位には、Pabitra Dangol 氏の“Life insurance demand determinants: Evidence from 27 Asian countries and Investment opportunities to Japanese firms in Nepal”, Raynell Andal Inojosa 氏の“Quantifying Potential Buyers’ Response Towards Life Insurance; The Attitude of Filipinos from a Highly-urbanized Region in the Philippines”, Avash Byanjankar 氏・Bishal Dhakal 氏の“Fixing the Life Insurance System in Nepal: Better Alternatives to the Current Status Quo”, の三編が選考された。

最初の論文は、アジア 27 か国のデータを使って生命保険需要を推計した上で日本企業のネパールへの投資機会を提案した論文である。論文のフレームワークや統計的処理など立派な作品であり、第 2 位の受賞も検討されたが、形式と方法の両面において前年度の受賞作品に類似しており、その点でオリジナリティに欠けると判断された。また分析と日本企業への提言をむすぶ論理が弱いことも委員から指摘された。

二番目の論文は、フィリピン都市部の住民へのアンケートをもとに彼らの生命保険への態度を分析した論文である。記述統計分析が中心であるが、問題意識が明白であり、課題に対してしっかり立ち向かっている点に好感が持てた。ただし自身も最後に述べているように、サンプル数が 97 名と限られているという制約があるため、結論および提言が十分な

説得力を持たなかったことが残念である。

最後の論文は、ネパールの生命保険の普及率がなぜ低いのかを検討し、その改善策を考えると、非常に健全な問題意識をもった作品である。本論文は、ネパールにおける生命保険普及が素材されている主要な理由を貧困層の存在に求め、アフリカの諸国の分析と比較しながら検討をしている。また改善策として、MFなどの金融技術的なものの他に、長期的に貧困層が生命保険を信頼するような政策を政府が行うことなどを提言している。記述的な論文であるが、構成と文章もしっかりしており、事実認識、国際比較の後に考察が行われるという手堅い論文であることが評価された。

努力賞については一括して言及したい。努力賞該当作品は、計量分析を試みるものや、強い問題意識をもって現状分析を行うなど力作ばかりであった。しかし課題から結論に導く論理の脆弱さ、および分析力の不足などから、残念ながら入賞を果たせなかった。今後の健闘を期待したい。

最後に、投稿作品全体に関する感想には光と陰がある。本年は、学部生からも質の高い論文の投稿があった。また課題と結論が明白でない論文は少なく、平均的な水準は向上したことは喜ばしいことである。その反面、自ら汗をかいて行ったオリジナリティのある研究論文が少なかったのは残念だ。また計量分析を利用した論文もいくつか見られたが、データ、モデル、結果の吟味などにおいて不十分なものも散見されたのも残念である。選考委員会が投稿される留学生の皆様には、健全で強力な問題意識から生まれた課題発見と課題に対する果敢な挑戦である。この意味で、インターネットでデータを収集して要領よくまとめる論文や分析技法だけを凝らし結果の表を吟味することなく掲載するような論文は望んでいない。来年は、よりいっそう優れた投稿論文が集まることを審査委員長として期待している。

(公財) 国際保険振興会論文選考委員会委員長  
東京経済大学教授  
米山高生